

令和8年度

第68回 全国公立学校教頭会研究大会
第59回 北海道公立学校教頭会研究大会

札幌大会

提言者研修会要項



大会シンボルマーク

【マークの説明】

札幌市の花は「スズラン」、木は「ライラック」、鳥は「カッコウ」であり、街の中心にある「時計台」は札幌市のシンボルとなっている。このマークは、それらを組み合わせてデザインした。

また、北海道公立学校教頭会は、北海道を6ブロックに分け、研究を進めている。その6ブロックをスズランの六つの花に見立て、一つの茎でつながることでそのまとまりを表した。

月 日 令和8年1月24日(土) 13:00~16:00

配信会場 北海道立道民活動センター「かでの2・7」10階の会議室より
Zoomによるオンライン配信

【 目 次 】

会場図（かでの 2・7）	1
1 提言者研修会実施計画（全体会日程・分科会詳細日程）	2
2 茨城大会の成果と課題	9
3 サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について	16
4 要項・提言原稿について	17
5 提言原稿執筆要項	18
6 表記について	21
7 補助資料について	23
8 大会当日の提言発表に向けてのお願い	24
9 提言者提出物一覧 提言者の皆様への事務連絡	25
10 課題別分科会 記録用紙	26
11 課題別分科会 交流カード	28
12 札幌大会分科会協議の柱(案)	29
13 参加者名簿	30

10F



エレベーター



男子トイレ



給湯室



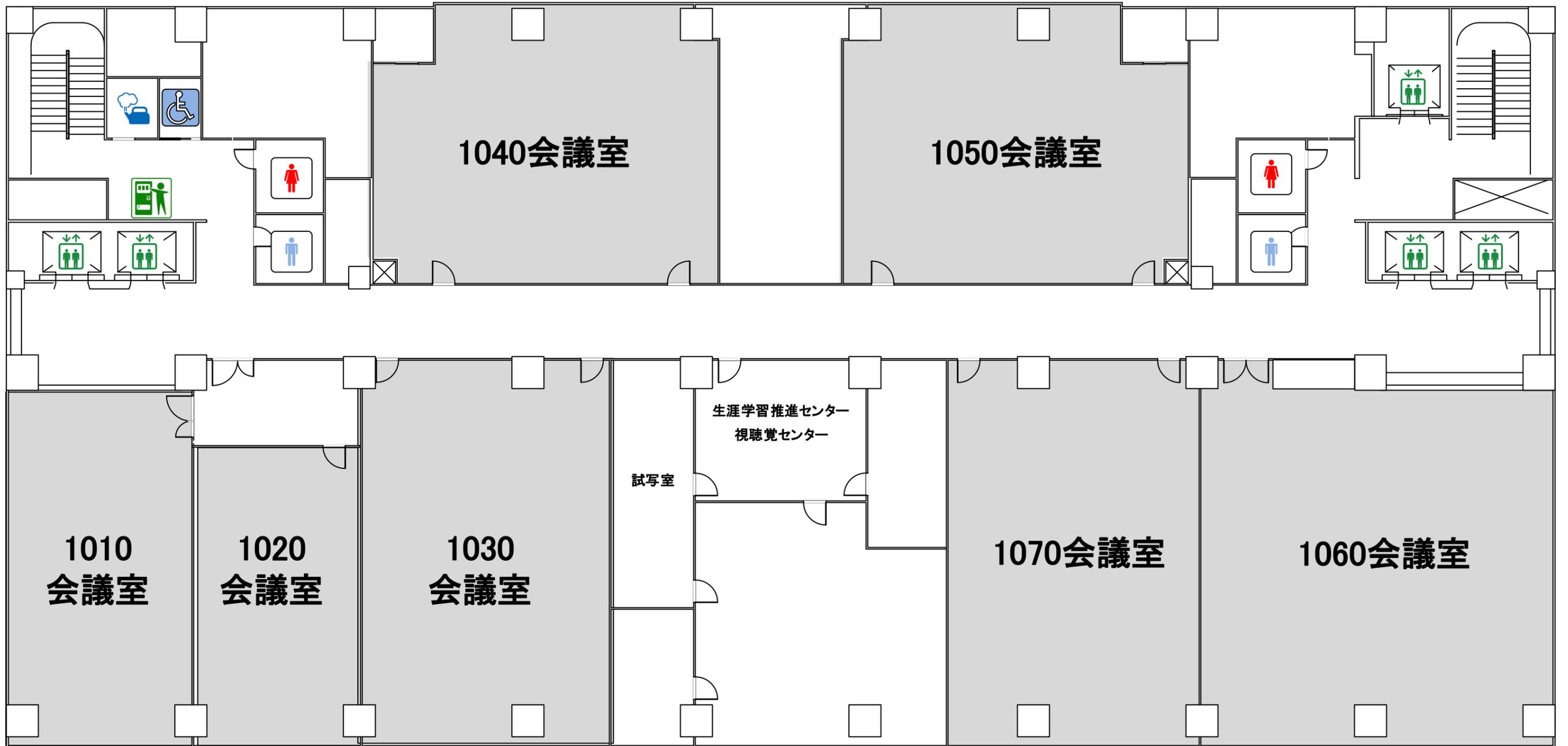
身障者用トイレ



女子トイレ



飲料水自動販売機



かえる27

提言者研修会 実施要項

1 目 的

各分科会提言者が執筆した提言原稿をもとに、提言者と全公教と大会実行委員会が全公教の研究の視点や札幌大会のサブテーマに照らして、提言内容を広く深く交流する場とする。

2 開催期日 令和8年1月24日（土） 13:00～16:00

3 開催方法 オンライン（ZOOM ミーティング） ※分科会はブレイクアウトルームを設定

4 場 所 北海道立道民活動センター「かでの2・7」（全体会・分科会：オンライン発信会場）

5 日程及び内容、次第等

(1) 全体会

司会：大会研究副部長（上野 智恵美）

時 間	内 容	担 当
12:00	ZOOM 接続開始、接続確認、出席確認 ＜全体会＞	大会渉外部 (吉田信興・丹羽真悠子)
13:00	①開会のことば	大会副実行委員長（中川 幸治）
13:01	②全公教会長あいさつ	全公教会長（稲積 賢）
13:06	③札幌大会実行委員長あいさつ	大会実行委員長（照井 志暢）
13:10	④第68回札幌大会の意義について	全公教研究部長（鈴木 智博）
13:15	⑤提言者紹介	大会研究副部長（岡本 真吾）
13:20	⑥札幌大会の概要について（日程・会場・運営等）	大会事務局長（鈴木 圭一）
13:25	⑦研究主題、サブテーマ、研究協議の視点	大会研究部長（道佛 智志）
13:30	⑧本日の分科会の進め方、今後の日程等について (最終提言原稿締切までの日程・補助資料・提出方法等)	大会研究副部長（長谷川洋志）
13:35	⑨質疑応答、諸連絡	大会研究次長（伊藤 大輔）
13:40	⑩閉会のことば ※休憩と移動15分（13:55 開始）	大会副実行委員長（中川 幸治）

(2) 分科会（第1～5分科会） ※第6分科会・特別分科会Ⅰ・特別分科会Ⅱは行わない。

時 間	内 容	備 考
13:55	①開会（司会）	参集、オンライン参加者全員
13:56	②参加者自己紹介	
14:00	③分科会の進め方（司会） ＜分科会Ⅰ＞	
14:05	①提言発表Ⅰ 15分	

14:20	②質疑応答・交流 20 分	休憩15 分間 (15:05 再開)
14:40	③協議の柱検討 10 分	
	<分科会Ⅱ>	
15:05	①提言発表Ⅱ 15 分	終了後退出
15:20	②質疑応答・交流 20 分	
15:40	③協議の柱検討 10 分	
15:50	④閉会 (司会)	

6 参加者

<全公教> 全公教役員、全公教研究部、全公教事務局

※分科会 (ブレイクアウトルーム) 時、全公教研究部員は分科会を固定。全公教役員、事務局はスタート分科会を固定するが、そののち自分の意志で巡回可

<提言者> 全提言者 : 14名

※分科会 (ブレイクアウトルーム) 時は自分の提言する分科会に入室

<次年度及び次々年度開催県> 兵庫県、島根県

※分科会 (ブレイクアウトルーム) 時は希望する分科会に入室 (事前に希望調査実施)

<札幌大会実行委員会> 大会役員、大会実行委員、分科会運営委員 全員参集が基本

※分科会 (ブレイクアウトルーム) 時は分科会に固定参加が基本。一部が会場巡回。

7 提言者研修会開催に関する日程

(1) 提言原稿の締切 (A4用紙 2 枚) → 令和 7 年 11 月 21 日 (金) 厳守

(2) 提言原稿の確認

- 1 大会事務局が提言原稿 14 本をメールで受信 令和 7 年 11 月 21 日 (金) まで
→ 全 14 本を実行委員へ→ 担当分科会の原稿 2 本を中心に誤字脱字チェック
→ 担当 2 本を分科会運営委員へ→ 誤字脱字チェック

2 実行委員会研究部の担当者に集約 令和 7 年 11 月 28 日 (金) まで

3 研究部でチェック完了 最終原稿版 14 本の決定 令和 7 年 12 月 2 日 (火) まで

4 大会事務局より提言者へ最終チェック原稿を送付し確認をしてもらう

令和 7 年 12 月 4 日 (木) まで

(3) 全公教による原稿の検討・審査

○大会事務局から全公教へ、大会実行委員会が最低限の修正を加えた (提言者確認済) 提言原稿を送付する。 → 令和 7 年 12 月 5 日 (金)

○全公教で原稿の検討・審査を行う。 → 令和 7 年 12 月 8 日 (月) ~ 令和 8 年 1 月 5 日 (月)

(4) 提言者研修会「分科会」で活用する「交流カード」の事前記入を

「交流カード」は提言内容に関する感想や意見を記入するもので、提言者研修会分科会で活用します。事前記入にご協力ください。

記入者 : 全公教研究部員 大会実行委員 分科会運営委員

- 1 全公教研究部員には令和 7 年 12 月 5 日 (金) に大会事務局から提言原稿を送付する際に「交流

カード」のデータも添付いたします。

- 2 大会実行委員、分科会運営委員にも令和7年12月5日（金）に提言者のチェック後原稿と「交流カード」を送信します。
- 3 全公教研究部員と分科会運営委員並びに大会実行委員で分科会に所属する方は自分が担当する分科会の提言原稿2本分の「交流カード」を事前記入し研修会当日を迎えてください。記入した「交流カード」は研修会後に大会事務局が集約し、提言者に送付します。

(5) 提言者研修会資料の送付

○大会実行委員会は、提言者研修会の要項及び提言者原稿を冊子データに取りまとめ、HPにアップし関係者へ周知する。→ 令和8年1月14日（水）まで

○全公教事務局は、受け取ったデータを全公教担当者へ送付する。→ 令和8年1月19日（月）まで

(6) 提言者研修会后、「交流カード」を事前記入した方は大会事務局に提出する。

→ 令和8年1月30日（金）まで

※大会事務局は、提出された「交流カード」を直ちに該当提言者へ送付する。

8 提言原稿完成に向けた日程

※提言者研修会後の原稿修正のやり取りは、大会研究部が中心となっていく。

○提言者は、原稿データを修正し、大会事務局へ提出する。→ 令和8年2月16日（月）まで

○大会研究部（研究部長）→全公教研究部員→大会研究部（研究部長）→大会研究部（分科会担当係長）→提言者→大会研究部（分科会担当係長）の順に修正を加えながら原稿を回付し、完成を目指す。→ 令和8年3月23日（月）まで

○大会研究部内で原稿修正の経過を随時確認し合い、全国大会の運営・協議に向けた課題の共有を進めていく。

※提言原稿は3月中にいったん完成させ、最終提出期限は令和8年5月11日（月）とする。

※プレゼンテーションデータの提出は、令和8年7月6日（月）とする。

9 その他

○提言者研修会の要項（印刷冊子）は作成しない。PDF データのみの送付とする。

	第1 A分科会 教育課程に関する課題 参集 かでる2・7 1010 会議室	第1 B分科会 教育課程に関する課題 参集 かでる2・7 1020 会議室
	提言者 佐藤 寿広 (会津坂下町立坂下中) 古館 幸恵 (小樽市立忍路中央小) 全公教 中津 大輔 (青森市立荒川中) 司会者 齋藤 直樹 (札幌市立もみじの丘小) 運営委 青木 啓洋 (北広島市立緑ヶ丘小) 実行委 前田真奈美 (札幌市立前田中央小) 市川 暁子 (札幌市立北野台中) 照井 志暢 (札幌市立円山小) 保格 論 (札幌市立白石中) 兵 庫 石野 誠悟 (たつの市立東栗栖小) 立花 貴志 (芦屋市立浜風小) 酒向 祐介 (西宮市立総合教育センター附属 西宮浜義塾教育学校) <この分科会からスタートし、その後フリー> 全公教 鈴木 智博 (阿賀野市立水原小)	提言者 坂爪新太郎 (藤岡市立東中) 欠席 甲谷美映子 (乙部町立乙部中) 全公教 小林 亮太 (さいたま市立三室中) 司会者 齊藤 敏弘 (小樽市立銭函中) 運営委 森岡 香子 (札幌市立八軒中) 羽毛 靖恵 (札幌市立二条小) 実行委 長谷川洋志 (札幌市立篠路小) 佐藤 宏充 (札幌市立手稲鉄北小) 中村 珠世 (札幌市立八軒北小) 野崎 猛 (札幌市立北九条小) 兵 庫 藤田 涼子 (西宮市立香櫨園小) 高原 督友 (姫路市立安室東小) <この分科会からスタートし、その後フリー> 全公教 三木 直史 (八王子市立加住小) 大高 珠恵 (川口市立元郷小)
13:55	①開会 (斎藤)	①開会 (齊藤)
13:56	②参加者自己紹介	②参加者自己紹介
14:00	③分科会の進め方 (青木)	③分科会の進め方 (森岡)
14:05	【分科会Ⅰ】 ①提言発表 (15分) 未来を切り拓く力を育む魅力ある学校づくり 自分の人生を切り拓くたくましさを育む「会津 ならではの」の学校づくりを目指して 福島県両沼地区教頭会 会津坂下町立坂下中学校 佐藤 寿広	【分科会Ⅰ】 ①提言発表 (15分) …なし 連携型小中一貫校(分離型)における特色を生か した教育課程の編成について -藤岡市の進める一貫校構想の組織的な対応と 教頭の関わりについて- 群馬県藤岡市教頭会 藤岡市立東中学校 坂爪新太郎
14:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
14:40	③協議の柱検討 (10分) ※休憩	③協議の柱検討 (10分) ※休憩
15:05	【分科会Ⅱ】 ①提言発表 (15分) 主体的に学び小樽の未来を創る豊かな人づくり を目指す 活力ある学校づくり -カリキュラム・マネジメントを軸とした学校 改善を図るために教頭はどう関わるか- 北海道小樽市教頭会 小樽市立忍路中央小学校 古館 幸恵	【分科会Ⅱ】 ①提言発表 (15分) 檜山の特色を生かし未来を切り拓く力を育む魅 力ある教育活動の推進と教頭の役割 ~ふるさとに根差す活力ある教育課程づくり~ 北海道檜山教頭会 乙部町立乙部中学校 甲谷美映子
15:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
15:40	③協議の柱検討 (10分)	③協議の柱検討 (10分)
	分科会終了とともに提言者研修会は終了	分科会終了とともに提言者研修会は終了
参加者数	現地参集6名 オンライン7名	現地参集7名 オンライン7名

	第2分科会 子供の発達に関する課題 参集 かでの2・7 1050 会議室	第3分科会 教育環境整備に関する課題 参集 かでの2・7 1040 会議室
	提言者 廣瀬 徹 (みよし市立三好中) 十倉 智秀 (帯広市立大空学園義務教育学校) 全公教 植木 征樹 (桐生市立梅田中) 司会者 渡部 堅 (札幌市立新陵中) 運営委 後藤 健 (札幌市立西野小) 高橋 健一 (札幌市立福移学園) 実行委 一関 浩 (札幌市立上野幌中) 鈴木 圭一 (札幌市立北都小) 鞍貫 耕平 (江別市立江別第一中) 吉田 信興 (道公教事務所) ホスト 丹羽真悠子 (道公教事務所) ホスト補助 全会場サポート 兵庫 黒瀬 将行 (神戸市立高丸小) <この分科会からスタートし、その後フリー> 全公教 井部 良一 (全公教事務局) 兵庫 泉 しのぶ (神戸市立渚中)	提言者 小賀 亜己 (古座川町立明神小) 鈴木 亮 (函館市立旭岡中) 全公教 伊藤 大輔 (札幌市立幌東中) 荒木 達彦 (東海市立船島小) 司会者 岡本 功一 (札幌市立栄東小) 運営委 中村 隆城 (札幌市立北都中) 神 充哲 (札幌市立平岡小) 実行委 中島 大輔 (札幌市立西小) 中川 幸治 (札幌市立西陵中) 林 潤一 (札幌市立伏古北小) 兵庫 藤原 禎司 (市川町立鶴居小) 島根 清山 智江 (松江市立忌部小) <この分科会からスタートし、その後フリー> 全公教 御守 薫子 (全公教事務局)
13:55	①開会 (渡部)	①開会 (岡本)
13:56	②参加者自己紹介	②参加者自己紹介
14:00	③分科会の進め方 (後藤)	③分科会の進め方 (中村)
14:05	【分科会Ⅰ】 ①提言発表 (15分) 21世紀をたくましく生き抜く子供の豊かな人間性の育成 ―不登校の未然防止に向けた取組を通して― 愛知県みよし市小中学校教頭会 みよし市立三好中学校 廣瀬 徹	【分科会Ⅰ】 ①提言発表 (15分) 地域と共に歩む学校づくりー学校運営協議会のさらなる充実に向けた教頭の役割ー 和歌山県古座川町教頭会 古座川町立明神小学校 小賀 亜己
14:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
14:40	③協議の柱検討 (10分) ※休憩	③協議の柱検討 (10分) ※休憩
15:05	【分科会Ⅱ】 ①提言発表 (15分) ウェルビーイングを基軸とした学校経営と教頭の新たな役割 ～北海道帯広市の体系的な実践から学ぶ教頭のマネジメント機能の強化～ 北海道帯広市教頭会 帯広市立大空学園義務教育学校 十倉 智秀	【分科会Ⅱ】 ①提言発表 (15分) 安心して学び、共に成長できる教育環境整備における教頭の役割 ー校内支援体制の再構築と「しなやかに歩み続ける力」を育む学校づくりー 北海道函館市中学校教頭会 函館市立旭岡中学校 鈴木 亮
15:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
15:40	③協議の柱検討 (10分)	③協議の柱検討 (10分)
	分科会終了とともに提言者研修会は終了	分科会終了とともに提言者研修会は終了
参加者数	現地参集8名 オンライン6名	現地参集7名 オンライン6名

	第4分科会 組織・運営に関する課題 参集 かでの2・7 1030 会議室	第5A分科会 教職員の専門性に関する課題 参集 かでの2・7 1060 会議室
	<p>提言者 土井 善浩 (江津市立青陵中) 佐藤 知 (函館市立柏野小)</p> <p>全公教 南 昌伸 (田原本町立東小) 露木 克久 (八頭町立八東小)</p> <p>司会者 高橋 学 (余市町立西中)</p> <p>運営委 小路 美和 (札幌市立新川中) 安澤 徹也 (札幌市立真駒内公園小)</p> <p>実行委 中川 雅之 (札幌市立簾舞中) 三浦 祐大 (札幌市立東園小) 矢澤 研 (札幌市立白楊小)</p> <p>兵 庫 小谷 俊正 (朝来市立糸井小)</p> <p><この分科会からスタートし、その後フリー> 兵 庫 横江 博之 (明石市立花園小)</p>	<p>提言者 山中 誠弘 (松山市立北条南中) 渡部 潤 (釧路市立愛国小)</p> <p>全公教 濱田 伸哉 (松山市立久米中)</p> <p>司会者 今野 信彦 (南幌町立南幌小)</p> <p>運営委 丸山 浩太 (札幌市立琴似中) 菅谷 昌弘 (札幌市立厚別中)</p> <p>実行委 押切 智哉 (札幌市立福井野中) 杉田 勝 (札幌市立南が丘中) 田中 敏貴 (札幌市立新川中央小)</p> <p>兵 庫 蓬萊 知子 (三木市立吉川中)</p> <p><この分科会からスタートし、その後フリー> 全公教 中原 秀一 (町田市立真光寺中) 実行委 道佛 智志 (札幌市立北野小)</p>
13:55	①開会 (高橋)	①開会 (今野)
13:56	②参加者自己紹介	②参加者自己紹介
14:00	③分科会の進め方 (小路)	③分科会の進め方 (丸山)
14:05	<p>【分科会Ⅰ】</p> <p>①提言発表 (15分) 小規模な教頭会組織による研究大会運営に向けての取組 ～11人で281名の教頭先生をおもてなし～ 島根県江津市教頭会 江津市立青陵中学校 土井 善浩</p>	<p>【分科会Ⅰ】</p> <p>①提言発表 (15分) 若手教員の授業力向上に向けた教頭の関わり ー「松山の授業モデル」の実現に向けてー 愛媛県松山市中学校教頭会 松山市立北条南中学校 山中 誠弘</p>
14:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
14:40	③協議の柱検討 (10分) ※休憩	③協議の柱検討 (10分) ※休憩
15:05	<p>【分科会Ⅱ】</p> <p>①提言発表 (15分) 未来を切り拓く豊かな人間性と創造性を育む 活力ある学校づくり ～活力ある学校をつくる「組織・運営」における 教頭の関与のあり方～ 北海道函館市小学校教頭会 函館市立柏野小学校 佐藤 知</p>	<p>【分科会Ⅱ】</p> <p>①提言発表 (15分) 夢と志をもち未来を切り拓く力を育む活力ある 学校づくりの推進 ～教頭間の日常的なつながりを基盤とした質の 高い教職員集団の育成～ 北海道釧路市小中学校教頭会 釧路市立愛国小学校 渡部 潤</p>
15:20	②質疑応答・協議 (20分)	②質疑応答・協議 (20分)
15:40	③協議の柱検討 (10分)	③協議の柱検討 (10分)
	分科会終了とともに提言者研修会は終了	分科会終了とともに提言者研修会は終了
参加者数	現地参集6名 オンライン6名	現地参集7名 オンライン5名

	<p>第5B分科会 教職員の専門性に関する課題 参集 かでる2・7 1070 会議室</p>
	<p>提言者 仲間 智 (宮古島市立狩俣中) 上野さえ子 (佐呂間町立浜佐呂間小) 全公教 奥野 英二 (宮崎市立加納中) 司会者 笹野 直人 (札幌市立西岡北小) 運営委 阿部 哲 (長沼町立長沼中) 渋谷 啓一 (札幌市立厚別南中) 実行委 岡本 真吾 (札幌市立札幌中) 渡邊 裕治 (札幌市立宮の森小) 上野智恵美 (札幌市立中央中) 兵庫 西垣 雅文 (丹波市立東小) 坂本 伸明 (三木市立緑が丘中)</p>
13:55	①開会 (高橋)
13:56	②参加者自己紹介
14:00	③分科会の進め方 (小路)
14:05	<p>【分科会Ⅰ】 ①提言発表 (15分) 教職員の資質能力の向上を図るための教頭の関わり ー授業改善を核とした連携・協働を通してー 沖縄県宮古地区教頭会 宮古島市立狩俣中学校 仲間 智</p>
14:20	②質疑応答・協議 (20分)
14:40	③協議の柱検討 (10分) ※休憩
15:05	<p>【分科会Ⅱ】 ①提言発表 (15分) 学校段階間連携を通じた、教職員の学校運営参画意識の向上 ～18年間を見据えた保小・小中・中高連携の取組の推進と教頭の役割～ 北海道遠軽地区教頭会 佐呂間町立浜佐呂間小学校 上野さえ子</p>
15:20	②質疑応答・協議 (20分)
15:40	③協議の柱検討 (10分)
	分科会終了とともに提言者研修会は終了
参加者数	現地参集6名 オンライン5名

令和7年度 茨城大会における成果と課題

第1課題「教育課程に関する課題」(第1A分科会)

【成果】

- 9か年をとおした「学習者主体の学び」を具現化する教育課程を形にするためには、学校内、あるいは小中学校間でビジョンを共有し、日常的に情報交換が可能となる環境整備を図ることが重要で、その旗振り役が、副校長・教頭の担うべき役割であることが明らかとなった。
- 小中学校間で定期的に相互に授業参観を行ったり、学習指導の研究を進める枠組みを整えたりすること、情報共有のためのデジタルツールの活用と活用のための環境整備・継続的な改善といったことが、全国各地でそれぞれの実態に応じて行われており、成果を上げていることが共有された。
- 社会に開かれ、且つ持続可能な教育課程を編成するためには、カリキュラム・マネジメントにより、適切な視点をもって、常にその改善に取り組むことが重要である。あえて学校の弱みを地域に伝えながら、地域を知り、地域と関わり、地域と職員をつなぐことが、副校長・教頭が果たすべき大きな役割であることが確認された。

【課題】

- 小中連携を図りながら授業改善を進めて行く上での課題の一つに、個々の教員の授業改善に向かう温度差がある。各教員が授業改善の必要性を切実に受け止め、主体的に授業改善に取り組む教員集団を形成していくためには、副校長・教頭の働きかけに工夫が必要である。
- 社会に開かれた教育課程を持続的なものとする上での課題の一つに、構築してきた地域との活動・関係が、副校長・教頭の異動に伴って大きく変化してしまうケースがある。様々な教員が地域と学校をつなげる役割を果たせるよう、副校長・教頭による戦略的な人材育成が重要である。
- 教育課程の充実に係る課題として、カリキュラムづくりに対する教員の主体的な参画の促進、教員の働き方改革とのバランスの取り方の難しさがある。カリキュラムづくりへのやりがいをもどくようにして実感させるか。それを教員の働き方改革とどのように両立させていくか。地区の単位副校長・教頭会が個々の取組を共有し、ブラッシュアップする場となることが解決の鍵となる。

第1課題「教育課程に関する課題」(第1B分科会)

【成果】

- 地域学習の取組を基盤に、福祉学習や児童との交流を活発に行い、児童の学びや育ちを地域の特性に即して深めることができた。特に小中合同の授業参観や振り返りを通じて、児童生徒の姿を切り口に「目指す子供像」の共有が進み、系統的で持続可能な教育活動の推進につながった。
- 小中合同研究では、全教職員が共に参画し、組織的に小中連携を深めることができた。教職員間の協働が促進されたことで、児童の学力向上や意欲向上、また教職員自身の授業改善意識の高まりにつながった。
- 教頭が校種間や地域の窓口となり、目的を明確に示して相手に伝えることで、担当者同士の具体的な協議が充実し、実効性のある連携へとつながった。副校長・教頭がつなぐ役割を果たすことで、園・小・中・高・特支など多様な校種の連携が組織的に推進された。
- 校種や校種を超えた「人」と「人」とのつながりを土台に、組織的・計画的に進める仕組みづくりが進み、児童生徒にとっても教職員にとっても魅力ある学校づくりが進展した。
- 授業改善では「習得」と「活用」のバランスを工夫し、知識の理解だけでなく実社会を見据えた活用の場

面を取り入れることで、生徒の学びの深まりと広がりが実現した。

- 教頭会・副校長会での協働研究を通じて、各校の教職員間の協力関係が強化され、教育目標に基づく一貫した指導が可能となった。副校長・教頭が調整・助言役を担うことで、授業改善や学校運営が組織的・計画的に進められた。
- 教職員がチームとして取り組む仕組みを副校長・教頭が提案し、協働体制を整えたことで、生徒の学びの質の向上だけでなく、教職員にとっても学び合い・高め合う風土が広がった。

【課題】

- 副校長・教頭やキーパーソンの力量に依存するのではなく、引き継ぎ可能な手順や仕組みを整え、誰が担っても持続できる組織体制を構築することが大切である。
- 地域学習や交流が「活動が目的化」しないよう、教育課程の中にねらいや評価を明確に位置付け、資質・能力の育成とつなげていく必要がある。
- 小学校側の視点に偏らず、幼保・中・高・特支などそれぞれの特性や文化を尊重し、相互の学び合いを保障する校種間の“対等な関係”を築くことが課題である。
- 札幌市全体に広げる際には、取組の精選や効率化を進め、教職員の負担を減らしながら持続可能な連携の在り方を模索することが求められる。副校長・教頭は、目的を吟味し、負担を調整しながらも、多様な人材が自分事として関わられるようコーディネートしていくことが重要である。
- 「習得」と「活用」のバランスをさらに高めるために、基礎学力の定着と発展的な活用を系統的に位置づけ、授業改善を継続することが求められる。
- 教頭会・副校長会での研究成果を校内に浸透させるには、公開授業やリフレクション、ループリックの活用など、組織的な改善サイクルを短期で回す仕組みづくりが重要である。
- 生徒一人一人の資質・能力の伸長を支えるため、意識調査や成果検証を定期的に行い、データを根拠とした改善に取り組む必要がある。
- 市全体に成果を広げるためには、情報共有や教材・評価の共同開発を推進し、教員の負担を軽減しながら持続可能な協働体制を整えることが副校長・教頭に求められる。

第2課題「子供の発達に関する課題」(第2分科会)

【成果】

- 地域の方の思いと、子供たちが求めていることをすり合わせていくコーディネーターの役割が大切であることを共有することができた。
- 学校の弱みを見せることで、地域の協力を得ることができる。学校の悩みを出し、課題を学校運営協議会で発信したり、地域行事等で信頼関係を築いたりしていくことが有効。
- 個に応じた居場所づくり、個に応じた教育ができています。コミュニケーションの機会を拡張することで、先生方の笑顔もかなえることができたと感じる。
- インクルーシブ教育の一環で、関心の高い効果的な取り組みである。地域により状況は異なるが、人材のネットワークづくりも副校長・教頭の仕事であると再認識された。今後も児童生徒を大事に考えマネジメントをしていきたい。

【課題】

- 学校は、「自分たちの生き方や豊かな心を育てようとしているか」について、地域の否定的な意見に対し、質問や返答の仕方を変えてみることで、地域や保護者とつながることができる。共有のビジョンを持つことで、ずれを生ませない。そのためにはグランドデザインを手元において、双方で話を進めていく必要がある。
- 不登校の課題を地域へ投げかけ、外部の方の協力を得て、別室登校で交流をするなど、課題解決に向け

て、地域の方の意見や協力を得ていくことが大事。

- 全国的に人員不足。学校と保護者、双方の意見を聞いてつなぐことが大事。それぞれの立場に立って考えることで、信頼を獲得していく必要がある。

第3課題「教育環境整備に関する課題」(第3分科会)

【成果】

- 人的な教育環境整備の必要性が高まる中、学校運営協議会を組織し、地域人材を活用することで、学習支援、体験活動、安全管理など、さまざまな面で協力を得ることができる。地域の方々の本物の力、温かい心に触れることで、子供たちは地域のよさを認識することができ、地域の一員として生きていこうとする意欲や態度の育成につながっている。
- 地域との連携、コミュニティ・スクールを進める中で、副校長・教頭がチームとなり、それぞれの運営組織との関係性も含めて取組を共有することで、各校の実践を互いに生かすことができる。また、情報共有で明らかになった課題について行政にも働きかけることで、学校・地域・行政の連携が強化され、学校間格差の軽減などにつなげることができる。
- 地域との連携について、人材確保の難しさが懸念材料としてある中、地域住民だけでなく、大学をはじめとする近隣の教育機関や企業と連携を図っている実践が全国各地で進められている。学生や現役世代を取り込むことで、高齢化などの問題に左右されない持続可能な取組に発展させることが期待できる。

【課題】

- 地域によっては高齢化や人口減少などにより、人材の確保が難しくなっている。また、地域コーディネーターの人選については、行政によるフォローがある地域は少なく、運営組織を固め、活動が軌道に乗るまでに時間がかかる。また、組織の立ち上げや活動の運営について、地域コーディネーターや副校長・教頭への負担が大きくなっている。
- 副校長・教頭の異動、地域コーディネーターの交代などにより、当初の目的が適切に共有されず、学校と地域の連携が持続可能なものとなりにくいケースが見られる。子供は地域のためにあるということ、また副校長・教頭は校長を助ける立場であるということにも立ち返り、学校が目指す子供の姿、地域が目指す子供の姿を具現化できるよう、副校長・教頭は調整力を発揮する必要がある。そして、学校に関わりのある一人一人が参画できる仕組みを構築しなければならない。

第4課題「組織・運営に関する課題」(第4分科会)

【成果】

- 揃わない前提の学校づくりを意識し、これまでの画一的な指導から生徒に考えさせる支援・個々の生徒に寄り添った丁寧な支援を心がけるなど、教頭が教職員全体の価値観のアップデートを支援したことで、教員と生徒の信頼関係が構築され、新規不登校者が82%減少した。
- 教職員が「揃える」という従来の価値観をアップデートしたことで、生徒の主体性を引き出す授業の在り方を自ら考え、自主研修を行うなど、教職員が互いに学び協力し合う学校文化を構築した。これにより80%を超える生徒が授業を「楽しい・わかりやすい」と回答するなど、授業の質が向上し、生徒の学習意欲が高まることにつながった。
- 教職員の現状を把握し、組織の発達段階に応じた改革を副校長・教頭が校長と教職員のパイプ役となり、「自主・向上性」と「同僚・協働性」を両立させる取組を通じて、組織としての目標や共有ビジョンの形成を進めた。これにより、教員の働きがいが高まり、組織の活力が向上し、長期的な視点を持つ教員組織の育成を進めることができた。
- 地元短大との中大連携や町内小学校との交流事業など、地域の教育資源を積極的に活用することで学校

側だけでなく地域側にもメリットがある Win-Win の関係を築き、持続可能な地域連携に取り組むことができた。

【課題】

- 今後5年で教員のほぼ全てが入れ替わるため、これまでの取組の継続性が最大の課題となっている。単なる「伝統」として引き継ぐのではなく、常に「生徒が自ら考え判断し行動できるためにはどうすればよいか」を考える続けるマインドを継承していく必要がある。
- 保護者や地域が「揃える」ことを求める場合もあり、多様な価値観の中で学校運営を円滑に進めるには、合意形成と理解促進を継続的に進めることが大切である。
- 若手教員の増加とミドルリーダー層の不足により、OJT が機能しにくい状況があるため、計画的な人材育成が求められる。ベテラン層を含め、多様な年齢層や価値観を持つ教職員全体が同じ方向を向き、目標を共有できるよう、副校長・教頭がパイプ役となり継続的な対話と調整を行うことが不可欠である。

第5課題「教職員の専門性に関する課題」(第5A分科会)

【成果】

- 世代間連携と支援体制の強化によって、若手とベテランの協力やメンター制度、OJT を通じて、日常的な指導力向上と自己有用感が醸成され、校長・教頭の役割認識が明確化された。
- 教員同士の対話やアイスブレイクを通じて、風通しの良い職場環境が構築され、心理的安全性を向上。教員の働きがいやケアも「見える化」され、モチベーションが向上した。
- 若手指導を通じて、中堅・ベテラン教員が指導助言や模範授業を行うことで、自身の専門性も高まる好循環が生まれた。
- 授業公開や生徒指導マニュアルの整備、チーム対応体制の構築により、学校全体で若手育成に取り組む文化が形成された。
- 独創的なアイデアとスキル向上の推進の中で、「かえろうカード」や座談会を活用し、働き方改革を実現でき、授業公開やOJT 研修によるスキル向上も進展した。

【課題】

- 学校行事や部活動の影響で研修時間が確保しにくく、ICT 導入の普及率や効果的な運用も限定的で、時間・環境への制約がある。
- 若手とベテランの二極化が進み、ミドル層が育ちにくい構造的課題や、若手の早期退職者へのフォロー体制の不足が指摘された。
- 若手の心理的・技術的負担への対処が求められている中、各校の育成方針や足並みの不一致のため、育成方法の負担と統一性に課題がある。
- 生徒指導においては、ベテランの経験に依存する部分が多く、体系的な指導方法の継承が課題となっている。

第5課題「教職員の専門性に関する課題」(第5B分科会)

【成果】

- 教職員の学校運営参画意識向上に向けて、質問紙調査を活用することで、同僚性・協働性の向上と、学校組織風土と職場充実の関連性を明らかにすることができ、ベテラン教師が人材育成を行う当事者意識を持って、若手職員へどのような視点で声掛けや承認を行うべきかが明らかになった。
- 職場のウェルビーイングを高めるためには、管理職や同僚からのサポートや認められ感が「働きがい」につながり、「働きがい」の獲得が同僚性へ影響していることが明らかとなった。教頭の役割としては、具

体的な言葉がけや肯定的な評価を意識的に実行していくことが教職員の心理的安全性にもつながっていくことが調査から示された。

- 町内の教頭会が一体となって、副校長・教頭間のネットワークの良さを最大限に生かしながら、調整・連絡を行い、指導教諭が職員の教育指導の改善や充実に資する場を広く設定したことで、配置校である単一校だけでなく、町内全体の小中学校の教職員へ、指導教諭の授業力・指導力が伝播し、若手育成につながることができた。指導教諭の実践、アドバイスは町内の教職員の大きな指標となっている。

【課題】

- 質問紙による調査と副校長・教頭からの聞き取りから、同僚性・協働性の向上と、学校組織風土と職場充実の関連性を明らかにすることができたが、教職員のウェルビーイングのさらなる獲得には同僚による関わりに加えて副校長・教頭の関わりも必要不可欠だといえる。さらに、同僚性・協働性の向上が及ぼす学校運営参画意識の向上との関連性について検証し、同集団の意識の変容を見取る研究方法を模索し、明らかにしていきたい。
- 全国的に見て、今後ますます職場における若手育成の必要性が高まっていく中で、指導教諭やベテラン教師がもっている優れた授業力・指導力という大切な教育技術の継承をいかにやっていくべきか、さらなる取組やシステムの構築が必要である。指導教諭やベテラン教師の活用にあたり、管理職が適切に評価・支援をしながら、若手育成にあたる先生自身の当事者意識や働きがいの向上にも努めていく必要がある。

第6課題「職員室の心理的安全性を高めるー全国公立学校教頭会の調査を受けてー」（第6分科会）

【成果】

- ・提言テーマ「①全公教の調査結果分析と考察 ②職員室の心理的安全性を高める」
- ・演題「職員室の心理的安全性を高める ～全国公立学校教頭会の調査を受けて～」
- ・講師「元北海道公立中学校長 森 万喜子 氏」
- 講演では、森先生のユーモアを交えた話術により、心理的安全性を高めるということの本質を体験的に理解することができた。「学校教育目標の達成」「教職員一人一人の資質・能力の向上」「副校長・教頭として、組織及び個人の強みを生かした人材育成」「望ましい職員室・学校の在り方」等をテーマに講演はスタートした。しかし、森先生が話す内容はテーマから参加者が想像していたものと少し違い、まるで我々副校長・教頭の普段の勤務における様々な思いを代弁していただいたような爽快感が残るものであった。森先生の話をおいているだけで副校長・教頭の複雑な思いや歯痒さがどこかに飛んでいき、勤務における悩みについてその結論を端的に述べていただいた。森先生の語り口は軽快で、参加した副校長・教頭から終始笑みがこぼれていた。いろいろなテーマについて森先生が真に参加者に伝えたかったことは、心理的安全性をベースに考えることで「学校教育目標の達成」「教職員一人一人の資質・能力の向上」「副校長・教頭として、組織及び個人の強みを生かした人材育成」「望ましい職員室・学校の在り方」等の課題に対してその答えが自ずと導かれていくということである。
- グループ協議では、「各学校や地域における教育実践の現状と課題」と「全公教調査・文教施策と講演をもとにした具体的な改善策」の2本の柱で協議を進めることができた。参加者同士、それぞれの学校の現状や取組について盛んに意見を交流することができた。また、教育実践上の課題に対して、副校長・教頭という立場でどのように取り組んできているか、人材育成する上での悩みなどについて積極的に意見を述べることができていた。午前中に行われた森先生の講演を受け、どの参加者も心理的安全性を意識した交流ができていた。参加者の先生方からも終始笑顔が見え、充実した協議となったことが伺えた。

【課題】

- 全国公立学校教頭会の調査結果をより具体的な政策提言、各地区における要請活動をさらに積極的に行っていくことが重要である。

- 昨年度と同様に学校現場での人員不足等により、特に副校長・教頭の職務は依然として苦しい状況にある。授業だけでなく担任をもつ副校長・教頭も珍しくない。学校が心理的安全性を保った環境を維持できるよう、また、教師のウェルビーイングが子供たちの豊かな学びへつながるよう、副校長・教頭が積極的に行動していかなければならない。

特別分科会 I

講演：「教師が働きがい高める環境整備を推進していくための副校長・教頭の役割」

講師：埼玉県上尾市立上平小学校 校長 中島 晴美 氏

【成果】

- ウェルビーイングの必要性について、第4期教育振興計画からこれからの教育・コンセプトとして提唱されていることを確認し、ウェルビーイングの概念について理解することができた。また、ウェルビーイングな学校づくりについて、中島先生が実践してこられた数々の具体例を基に、今後自校で取り組んでいくことや新しいアイデアについて交流することができた。
- ウェルビーイング（幸せ）な組織は、生産性や創造性が高く、離職者が少ない、病休発生率が少ない、ということが分かった。
- ウェルビーイングな環境を構築するためには、副校長・教頭がウェルビーイングについて知り、活用することが大切である。幸せに生きる大人の姿を見て、子供たちは幸せに生きる力を身に付けて育つということ、ウェルビーイングな学校づくりが、働きがいのある職場づくりにつながるということを学ぶことができた。
- 教師の働きがい高める、ウェルビーイングな学校づくりのためには、副校長・教頭自身がウェルビーイングとなることが大切である。そのためにまず自分自身を整えること、そのことが教職員のウェルビーイングにつながり、児童生徒のウェルビーイングにもつながっていくということを学ぶことができた。

【課題】

- ウェルビーイングな学校づくりのための副校長・教頭の役割は、まず、学校の目標(ビジョン)を理解し、組織を目標に導く未来を見据えたビジョンを持つことである。そのためには、組織の状態をキャッチする必要がある。学校自己評価を全職員で分析し次年度の重点課題を立てることなどを通して自校の課題をつかみ、具体策を教職員とともに考え、校長に報告・進言・実行することができるとよい。
- 働きがいのある職場にするためには、教職員の心理的安全性が確保されることが不可欠である。副校長・教頭は、コミュニケーションを密に取り、より良い人間関係づくりのために尽力する必要がある。感謝とねぎらい、笑顔、言葉を大切にするとともに、ポジティブな発信を心がけて教職員に浸透させていくことが大切である。
- ウェルビーイングな学校づくりのためには人材育成は不可欠である。副校長・教頭はベテラン教員に働きかけ、一緒に入って見守って振り返る等、OJTを通して若手を育て、成功体験を積ませていくことが課題である。

特別分科会 II

魅力発信で 教員不足解消を—今 副校長・教頭としてできること—

午前の部：木内酒造株式会社 代表取締役社長 木内敏之 氏

「酒造り 200 年 木内酒造の世界への挑戦」

午後の部：教育研究家 妹尾昌俊 氏

「やってよかったという実感のある働き方改革を進めるには」

【成果】

- 「魅力発信」について、自校の魅力が見いだせていない方にとって、木内氏のチャレンジ精神や妹尾氏の抵抗感に寄り添うという講演内容が、自校の魅力発見の手立てに繋がるものであった。
- 木内氏の情熱と行動力の裏にある生き様は、教師としての営みにとって通ずるところが多く参考となった。その後に、妹尾氏の理論に基づいた教育に関する専門的な講演が位置付けられていたことで、本大会研修の学び全体を一体化した思考が生み出され、充実した研修となった。
- 木内氏の講演は、世界における日本人の立ち位置について、このままでは世界に取り残されてしまうという危機感や世界に通用する子ども達の育成の重要性が示された。さらに地域を愛し、地域を生かす工夫を考えることができる人財育成のために学校はどうしたらよいか等、受講者の考えるポイントが示され、自校に戻って教職員と協議したいという意見が多数あった。また、妹尾氏の講演では「まだやれることがあるかもしれない」という希望を受講者に抱かせ、今ある強みを生かしながら、先生方が笑顔で生き生きと働く姿を子供たちに見せることこそが、教員不足の解消につながっていくのだと確認できた。
- 木内氏が、地元の資源の魅力を最大限に生かし、さらに循環させる仕組みを構築しながら、「茨城発世界へ」と挑むチャレンジ精神あふれる生き方や考え方に感銘を受けた方が多くいた。講演を受けてのグループ協議では、日本各地の副校長・教頭先生方が対話を通して学びを深めることができた。

【課題】

- 講演は興味深い意見や視点も多く、教育現場外からの話として参考になったが、テーマ自体がこの職業の根幹に関わる部分であり、協議をしても各学校単位での取組だけでは限界があり、国や県がどこまで学校任せにしない方策を出してくれるかという課題がある。
- 午前中の講演とテーマの結びつきを見つけ出すのが困難と感じている参加者がいた。また、参加者の勤務校で何ができるのかと考えることや抵抗感を減らすことは難しいと感じる参加者がいた。
- 成功している経営者の講話は自身の成功体験やそこまでのプロセスの説明が殆どで、失敗について語られる事があまりないと考え、自分の知識や力不足を感じた参加者がいた。
- 運営側としての仕事内容が直前まで見えにくかったことが課題である。
- 分科会の司会者の先生方に、講師の先生の講演内容や流れをもう少し早く適切に伝えることができればよかったという意見があり課題となる。

サブテーマ設定の理由及び研究協議の視点について

1 大会主題 「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

(第 14 期 全国統一研究主題 1 年次)

<主題に迫る視点> : 持続可能な社会の創り手の育成・ウェルビーイングの向上

「サブテーマ」 : 夢と志をもち未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進

2 札幌大会のサブテーマ

第 14 期 1 年次に当たる札幌大会は、前年度の茨城大会の研究の成果と、第 14 期全国統一研究主題及び主題に迫る視点の趣旨を踏まえて、サブテーマを「夢と志をもち未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」と設定した。

現代は予測が困難な時代であり、「VUCA」の時代（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）であると言われている。こうした中、第 3 期の教育振興基本計画期間中に発生した新型コロナウイルス感染症の感染拡大やロシアのウクライナ侵攻による国際情勢の不安定化は、まさに予測困難な時代を象徴する事態であった。このような危機に対応する強靭さを備えた社会をいかに構築していくかがこれからの重要な課題である。

こうした社会の実現に向けて、一人一人がよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、「持続可能な社会の創り手」になることを目指す考え方が重要になる。また、ウェルビーイングが実現される社会は、子どもから大人まで一人一人が担い手となって創っていくものである。社会全体のウェルビーイングの実現に向けては、個人のウェルビーイングが様々な場において高まり、組織のウェルビーイングも高い状態が実現され、そうした組織が社会全体に増えていくことが必要となる。子どもたち一人一人が幸福や生きがいを感じられる学びを保護者や地域の人々とともにつくっていくことで、学校に携わる人々のウェルビーイングが高まり、その広がりが一人一人の子どもや地域を支え、更には世代を超えて巡回していくという在り方が求められる。

北海道においても、学力や体力の低下、地域格差の拡大、道徳的な課題、心の問題、更には教職員の服務規律意識や資質・能力の向上、働き方改革の着実な実行、教職員のメンタルヘルスに関わるライフケアの課題等が山積している。

以上のことを踏まえ、サブテーマを「夢と志をもち未来をしなやかに歩み続ける力を育む 活力ある学校づくりの推進」と設定し、今求められている学校教育の在り方とその実現に向けての副校長・教頭の関与の在り方を探っていく。

3 札幌大会研究協議の視点

(1) 「未来を切り拓く力」の捉え

「未来を切り拓く力」を「夢と志をもち未来をしなやかに歩み続ける力」と捉える。

① 切り拓く力を生かしながら、他者と協働し豊かに生き続ける力や強固と柔軟を兼ね備えた強靭な対応力

身に付けた切り拓く力を生かしながら、自分の望む未来に向け、豊かに歩み続けたり、他者とともに未来を創造したりする行動力を育む。また、自分の夢の実現に向け、志を立てて歩み続けるためには、幾つもの困難を乗り越える強さが必要である。強固な身体や精神力で困難を撥ね除ける強さが必要であるとともに、予測が立たない事態や急激に変化する状況に柔軟に対応するしなやかな力も必要となる。時には正面からぶつかり、時にはいなしながら、困難に対応する強靭な資質・能力を育む。

② ウェルビーイングの実現に向け、一人一人が持続可能な社会の創り手

一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら社会的変化を乗り越えられ、「持続可能な社会の創り手」になることを目指すことが重要になる。未来に向けて自らが社会の創り手となり、課題解決を通じて持続可能な社会を維持・発展させていく力を育む。

(2) 「魅力ある学校づくり」の捉え

「魅力ある学校づくり」を「活力ある学校づくり」と捉える。

○ 魅力ある開かれた学校づくり

副校長・教頭が生き生きとリーダーシップを発揮し、教職員の経営参画意識や達成感、自信を高め、研究や研修による資質向上を通して、「学校力」「教師力」を育てる。また、教職員の心身の健康に配慮し、適正な勤務管理と業務改善を通して、持続可能な学校経営の維持と充実を図る。様々な工夫や関わりを通して、『教師にとって「働きたい」、子どもたちにとって「通いたい」、保護者・地域にとって「共生したい」、魅力ある開かれた学校づくり』に取り組む。

これらのことを達成していくために、私たち副校長や教頭が、学校現場においてどのようにリーダーシップを発揮していくか。3C「継続性」「協働性」「関与性」に焦点を当て、実践研究を通して有効な具体策を明確にしていきたい。

要項・提言原稿について

I 分科会の提言内容・研究の進め方

変化の激しい社会においては、生涯を通じて常に学び続ける姿勢が必要になってきており、家庭や地域との連携を進め、魅力ある学校をめざし共に育てていく視点が必要である。その推進役としての役割は、副校長・教頭が担っている。副校長・教頭の研究として、次の5点を研究の柱として取り組む必要がある。

- 副校長・教頭としての関与性が明確な研究
- 組織的で協働性のある研究
- 客観的で継続性のある研究
- 視点を明確にした鋭角的な研究
- 副校長・教頭としての資質向上につながる研究

1 踏まえない3つのポイント

- (1) 全公教第14期全国統一研究主題及び大会のサブテーマを踏まえた発表にする。
- (2) 提言領域は、全国共通課題（6課題）に沿って区分する。
- (3) グループ協議をしやすいするため、実践発表ではなく、ポイントをはっきりさせた提言型の発表にする。

2 研究の進め方の2つのポイント

- (1) 継続性・協働性・関与性（3C）に焦点を当てた実践的研究とする。
- (2) 全公教「研究の手引き」研究協議の視点に基づいて研究する。

II 分科会の提言者

- 1 分科会は、6課題10分科会とする。
- 2 第1課題から第5課題の1つの分科会は、全国提言1名、北海道ブロック提言1名とする。
- 3 第6課題は全公教が主催し、運営は全公教総務部が行う。
- 4 特別分科会Ⅰ（全公教研究部主催）・特別分科会Ⅱ（開催地実行委員会主管）を開催する。

III 大会要項原稿のまとめ方

- 1 研究主題
 - ・提言する課題を具体的に表示すること。
 - ・全公教第14期全国統一研究主題及び大会のサブテーマを踏まえ、提言する分科会の領域に基づいて設定する。
- 2 サブテーマ
 - ・研究主題が大きい場合や方向性を示す場合、サブテーマを設定し、研究内容をより具体的にしたり、焦点化したりすること。
- 3 主題設定の理由
 - ・なぜ主題を設定したのか。主題設定の背景や課題性を簡潔にまとめる。
- 4 研究のねらい
 - ・どのようなことが課題となっているのか。
 - ・どのような方法で課題解決に取り組もうとしているのか。
 - ・何を明らかにしようとしているのか。
- 5 研究の経過
 - ・研究に取り組んだ経過及び取り組み内容を簡潔にまとめる。
- 6 研究の概要
 - ・副校長・教頭として「いつ、誰に、何について、どのような関わり」を簡潔にまとめる。
 - ・課題解決への具体的な方策について、量的・質的にも重視する。
- 7 研究の成果と今後の課題
 - ・研究の成果と今後の課題を簡潔にまとめる。

提言原稿執筆要領①

I 字数・枚数について

- 1 体裁 20字×47行 2段組 A4判縦横書き
- 2 原稿 使用ソフト「Word」によるワープロ原稿
- 3 ページ数 2ページ

II 執筆の仕方について（具体例も参照）

- 1 1ページ目 上部8行に次のことを記載する。

※ 分科会名 研究課題「○○に関する課題」

※ 提言の研究主題 及び 副題

※ 提言者 ○○県○○市教頭会 ○○市立○○小学校 ○○ ○○

- 2 本文の開始 9行目より記載する。

- 3 提言項目

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">1 主題設定の理由（9行目から）2 研究のねらい3 研究の経過4 研究の概要5 研究の成果と今後の課題 <p>※上記5項目で項立てをお願いします。</p> |
|---|

- 4 フォント ポイント

※装飾等の体裁については、大会事務局で行いますので、見出し等にゴシック体や倍角文字等は使わず、標準字体のみで記載してください。

- 5 余白 上下・左右 20mm

- 6 文体 常体（○○である。 ○○と考える。）

- 7 図・表等 見やすい大きさに 縮図も可

※写真は可

提言原稿執筆要領②

I 表記

第○分科会 研究課題「○○○○に関する課題」

研究主題 ○○○○○○○○

－サブテーマ ○○○○○○○○－

提言者 ○○県○○市（地区・町）教頭会 ○○市立○○学校 ○○ ○○

1 主題設定の理由

4 研究の概要

2 研究のねらい

5 研究の成果と今後の課題 . . .

3 研究の経過

II 原稿への依頼事項

1 研究主題について

- (1) 全公教第14期全国統一研究主題を踏まえ設定する。
- (2) できるだけ具体性をもった研究主題とする。

2 副題について

- (1) 研究主題が広義の場合や研究の意図・方向性を示す場合に副題を設定し、具体化する。
- (2) 研究内容を端的に表すものとする。

3 主題設定の理由

- (1) 主題設定に至った背景、経過、地域性等々、課題との関係を考慮し、記述する。
- (2) 全公教編集による「研究の手引き」を参考にする。

4 研究のねらい

- (1) 主題に対し、何をどのように迫ろうとしたのかを明確に記述する。
- (2) 課題や研究主題を踏まえて、記述する。

5 研究の経過

- (1) 研究に取り組んできた経過、取り組み内容を簡潔に記述する。

6 研究の概要

- (1) 研究の継続性・協働性・関与性を十分意図した記述をする。
- (2) 課題解明への取り組みが具体的にわかるように記述する。
- (3) 提言の中心となる部分であり、執筆量は十分取るようにする。

7 研究の成果と今後の課題

- (1) 研究で明らかになったことや新たな課題を簡潔にまとめる。

8 原稿の内容確認と校正

- (1) 必要に応じて、提言者に連絡を取り、内容確認および原稿の書式や表記、誤字脱字等について校正する。

9 原稿提出について

<提出方法> 下記提出先に電子メールで提出してください。

電子メールの件名は

〔札幌大会第○分科会提言原稿 ○○立○○小（中）○○○○〕とする。

<原稿締め切り日> 令和7年11月21日(金)必着

北海道公立学校教頭会事務所

〒001-0017

札幌市北区北17条西4丁目1番1号301

TEL 011-746-3254 FAX 011-757-9611

E-mail doukokyo@mua.biglobe.ne.jp

<http://fc00071220171911.web3.blks.jp/>

表記について

- 1 本文は、「だ」「である」などの常体を用い、横書きにする。
- 2 文章においては、できるだけ専門用語を避け、校種や専門教科が違っていても理解できるよう、平易な言葉を使用する。
- 3 漢字や仮名遣いについては、「常用漢字」「現代仮名遣い」を基本とし、外来語や外国の人名・地名等には片仮名を使用する。本文中における漢字表記と仮名表記の不一致は避ける。
- 4 句点は「。」 読点は「、」を使用する。
- 5 「1年生」「3学期」「6組」など順番や表示を表すものは算用数字、「一つ」「一人」など熟語として用いられるものは漢数字を使用する。
- 6 「常用漢字表」にない漢字については、ふりがなを付けて用いることを基本とする。
ただし、日常よく使われるものについては、ルビを振らない場合もある。

【表記の具体例】

あいさつ → 挨拶	および → 及び（接続詞）
…にあたって → …に当たって	…におよぶ → …に及ぶ
あたりまえ → 当たり前	かかわる → 関わる
あとで → 後で	3か月、2かしょ → 3か月、2か所
在り方 → 在り方	きたる5月13日 → 来る5月13日
あるいは → あるいは（×或いは）	きづく → 気付く
…ということ → …ということ (×…と言うこと)	…ください → ください (○…資料を下さい)
裏付ける → 裏付ける	こころがける → 心掛ける
…していく → …していく (×…して行く)	ことば → 言葉
いくつか → 幾つか	こども → 子供
いっそう → 一層	こどもたち → 子供たち
いろいろ → いろいろ	1時間ごと → 1時間ごと（×1時間毎）
いわば → いわば	…ころ → …頃
うながす → 促す	computer → コンピュータ (×コンピューター)
おおいに → 大いに	さまざま → 様々
おこなう → 行う	さらに → 更に（副詞の場合）
おとな → 大人	さらに → さらに（接続詞の場合）
おもしろい → おもしろい	じゅうぶん → 十分（×充分）

ずいぶん → 随分
すなわち → すなわち (×即ち)
すでに → 既に
すべて → 全て
だいたい → 大体
…たち → …たち
ともだち → 友達
…のため → …のため (×…の為)
だれ → 誰
…づくり - …づくり (×作り)
つちかう → 培う
つながる → つながる (×繋がる)
できあがる → 出来上がる
…できる → …できる (×出来る)
てだて → 手だて
ドッジボール → ドッジボール
…とともに → …とともに (×…と共に)
…ととらえる → …ととらえる
(×…捉え等)
虫をとらえる → 虫を捕らえる
○や△とう → ○や△等
…するなど → …するなど (×…する等)
なお → なお (×尚 ×猶)
はぐくむ → 育む
はたらきかける → 働きかける
ひとりひとり → 一人一人
ふしぎ → 不思議
ふまえて → 踏まえて
ふりかえる → 振り返る
ふれあい → 触れ合い
または → 又は (接続詞)
まったく → まったく (全く 可)

みいだす → 見いだす
みとる → 見取り、見て取る
みにつける → 身に付ける
めあて → 目当て (めあて)
めざす → 目指す
もちろん → もちろん (×勿論)
もっぱら → もっぱら (×専ら)
…しやすい → …しやすい (×…し易い)
…するように → …するように
(×…する様に)
よさ → よさ (×良さ)
わかる → 分かる (×解る ×判る)
わきあがる → 沸き上がる わき上がる
(×湧き上がる)
わずか → わずか (×僅か)
わたくし → 私
わたし → 私
わたしたち → 私たち (×私達)
わりあい → 割合
わりあて → 割当て
われら → 我ら (×我等)
われわれ → 我々 (×吾々)
わんぱく → 腕白

補助資料について

札幌大会実行委員会研究部

補助資料については原則「なし」とします。

【理由】

- ・紙での資料は、オンライン参加の方には配付されない。しかしながら、茨城大会では補助資料をホームページにアップしていた。これらの補助資料は、すべてパワーポイント等で作成したものであり、このようなデータをアップする方法で当日の資料を確認できる。
- ・補助資料をなくすことで、印刷、郵送、配付等による時間的、費用的なコストを抑えることができる。

そこで、札幌大会では補助資料を原則「なし」とし、

大会ホームページに提言内容(パワーポイント等のデータ)をアップし、参加者が、そのデータをダウンロードしたり、印刷したりして分科会に参加をする。

としたいと考えます。

大会当日の提言発表に向けてのお願い

1 大会当日の提言発表データ作成にあたって

- ①パワーポイントソフトを使って作成をお願いします。
- ②動画を入れないようにお願いします。写真や図はかまいません。ただし写真も子供の顔が判明するもの、著作権に抵触するものなどは使用しないでください。
- ③アニメーション機能を使用しないようにお願いします。
アニメーション機能とは「文字」「写真」等に、回転させたり、登場させたり、消滅させたりする動きを付けて強調する機能です。

2 補助資料は作成しません

例年、提言者の中に補助資料を作成されていた方もおりました。札幌大会より補助資料は「なし」とします。大会当日の提言発表データの中に伝えたいすべてを盛り込んでください。

3 大会当日の提言発表データの提出について

大会当日の提言発表データを提出する際は、事前に大会事務局に連絡をください。大会事務局より大会用のクラウドにアップロードしてもらうためのやり方をご教示しますのでアップロードによる提出をお願いします。

4 大会当日は大会事務局が用意するPCを使用します

大会当日は大会事務局が用意するPCを使用します。作成者本人のPCを使つての発表はできません。事前にクラウドにアップロードしたものをPCに入れておきます。大会事務局が用意したPCでの発表をお願いします。

Zoomによるオンライン配信を快適に行うために、オンライン配信担当の早稲田大学アカデミックソリューションさんからの指示を受けております。特に「1」と「4」にある「ルール」です。大会成功のためにも必ず守っていただきますようお願いします。

提言者提出物一覧表

札幌大会実行委員会研究部

No.	提出物	提出期限	提出方法	備考
1	提言原稿（電子データ） ※提言者研修会後に訂正したもの	令和8年 2月16日（月）	メール 添付	札幌大会事務局に メール送信
2	提言原稿（電子データ） ※2月の回付以後、さらに訂正したもの	令和8年 3月23日（月）	メール 添付	札幌大会事務局に メール送信
3	【最終版】 提言原稿（電子データ）	令和8年 5月11日（月）	メール 添付	札幌大会事務局に メール送信
4	提言発表用プレゼンテーション （電子データ） ※パワーポイントを使用して作成 ※動画を入れない ※アニメーション機能を使わない	7月6日（月）	大会事務局に連絡 大会事務局のクラウドにアップロード	・大会事務局からクラウドにアップロードするための方法を教示するので、完成したら、大会事務局に連絡をいただきたい

提言者の皆様への事務連絡

札幌大会事務局事務所

<参加申込>

第一弾として、各単位副校長会・教頭会事務局が参加要請した人数分の参加者名簿一覧を作成しR8年4月30日までに札幌大会事務局に提出します。提言者の皆様は参加要請数には含まれておりませんが、その名簿に提言者として記入されるようになっております。それを受けて5月1日より参加者全員がWEB申込をします。提言者の皆様もWEB申込をします。提言者の皆様の大会参加料と昼食代は札幌大会事務局が支払いますので提言者の皆様のWEB上での支払いはありません。

<宿泊ホテル>

提言者の皆様14名の宿泊ホテルの予約と支払いにつきましては、札幌大会事務局が行います。基本的には大会1日目の1泊となります。ただし勤務地によっては前泊、後泊が必要になる方もいると思いますのでご相談ください。

<航空機の予約>

提言者が確定しましたら、北海道外の皆様は早めの航空機予約をお願いします。正規の航空運賃ではなく、ハイクラスの座席でもない、安価な普通座席の予約をお願いします。

課題別分科会記録用紙

令和8年1月24日(土)

☆スペースが足りない場合は適宜追加してください。

第 分科会	【研究課題】「 」に関する課題
司会者	【学校名】 立 学校【氏名】
記録者	【学校名】 立 学校【氏名】
提言者	【都道府県名】 【学校名】 立 学校【氏名】 【研究主題】 【サブテーマ】
提言の 趣旨・概要	○全国に何を提言したいのか(主題設定の理由・研究のねらい 等)
質疑・応答	○提言内容(ねらい・経過・概要)の明確化のために

<p>提言の協議</p>	<p>○提言内容に対する協議の視点について</p> <p>(1) 全国統一研究主題 及び 札幌大会サブテーマとの関連について</p> <p>(2) 3Cの視点から</p> <p>① 研究の継続性</p> <p>② 組織的な研究の協働性</p> <p>③ 副校長・教頭の関与性</p> <p>(3) 共感したことや、もっと広げたいこと</p> <p>(4) 本大会のむけての改善点や、今後に向けての課題点</p> <p>(5) その他、気づいたことや感想など</p>
<p>全国大会 協議の柱立て</p>	<p>○協議内容の焦点化(グループ協議への主体的参加)に向けて</p>

※記録は提言1 本ごとにまとめること。

☆この用紙は、本日の分科会終了後に本部(1050 号室)へ提出すること。

課題別分科会 交流カード

○この交流カードは、提言原稿について感じたことやご意見などを記入していただくものです。

○令和8年1月24日(土)の提言者研修会までに作成し、手持ちの資料として当日の協議や質疑応答の資料として活用してください。

○一提言につき1枚作成をお願いします。スペースが不足のときは2ページ以上になっても構いません。

○データは提言研修会終了後、令和8年1月30日(金)までに、大会事務局に送付してください。

<提出先> doukokyo@mua.biglobe.ne.jp

記入者所属等	()全公教研究部 ()札幌大会実行委員会 ※いずれかに○を記入	学校名:
		氏名:
第 分科会	提言原稿作成者 【都道府県名】 【学校名】	【氏名】 先生

☆提言原稿について、感じたことやご意見などを記入してください。

(1)全国統一研究主題及び札幌大会サブテーマとの関連について

(2)3Cの視点から

①研究の継続性

②組織的な研究の協働性

③副校長・教頭の関与性

(3)共感したことや、もっと広げたいこと

(4)本大会に向けての改善点や、今後に向けての課題点

(5)その他、気付いたことや感想など

(6)協議の柱としたいこと

【提言者研修会での発表・協議を踏まえての意見・感想等】

協議の柱(案)について

○協議の柱については、分科会の最後の10分間で決定していきます。

○下記の内容を各分会での話合いの原案とします。

分科会	協議の柱(案)
1A	①カリキュラムマネジメントを軸とした、魅力ある学校づくりを進めるための副校長・教頭の役割 ②校種間の連携と持続可能な地域協働体制を確立するための副校長・教頭の役割
1B	①9年間の学びをつなぐ組織的な連携体制と学校間調整のための副校長・教頭の役割 ②地域の人的・物的資源を「ふるさと教育」に利活用するための副校長・教頭の役割
2	①非認知能力・自己肯定感の育成とウェルビーイングを基軸とした学校経営における副校長・教頭の新たな役割 ②新たな不登校を生まない持続可能なシステム構築のための協働体制をつくる副校長・教頭のマネジメント
3	①学校と地域の協働を深化させ、学校運営に地域の力を生かすための副校長・教頭の役割 ②校内支援体制を再構築し、多様な背景をもつ児童・生徒の「居場所」を保障するための副校長・教頭の役割
4	①教頭会の実態を踏まえ、組織体制の見直しと業務の精選・委託を通して、効率的かつ持続可能な研究大会や研修の在り方を広げる副校長・教頭の役割 ②学校マネジメントを強化し、組織的に教育活動を推進する活力ある学校づくりにおける副校長・教頭の役割
5A	①若手教員の授業力を育成していくための副校長・教頭の役割 ②教職員集団の業務の効率化を図るための副校長・教頭の役割
5B	①18年間を見据えた異校種間連携に関する副校長・教頭の役割 ②授業改善を核とした連携・協働に関する副校長・教頭の役割

札幌大会提言者研修会 全参加者名簿

		所属	立場	名前	勤務地	分科会
1	1	東北・福島県	提言者	佐藤 寿広	会津坂下町立坂下中学校	第1A
2	2	北海道・小樽市	提言者	古館 幸恵	小樽市立忍路中央小学校	第1A
欠席		関東甲信越・群馬県	提言者	坂爪新太郎	藤岡市立東中学校	第1B
3	3	北海道・檜山	提言者	甲谷美映子	乙部町立乙部中学校	第1B
4	4	東海北陸・愛知県	提言者	廣瀬 徹	みよし市立三好中学校	第2
5	5	北海道・帯広市	提言者	十倉 智秀	帯広市立大空学園義務教育学校	第2
6	6	近畿・和歌山県	提言者	小賀 亜己	古座川町立明神小学校	第3
7	7	北海道・函館中	提言者	鈴木 亮	函館市立旭岡中学校	第3
8	8	中国・島根県	提言者	土井 善浩	江津市立青陵中学校	第4
9	9	北海道・函館小	提言者	佐藤 知	函館市立柏野小学校	第4
10	10	四国・愛媛県	提言者	山中 誠弘	松山市立北条南中学校	第5A
11	11	北海道・釧路市	提言者	渡部 潤	釧路市立愛国小学校	第5A
12	12	九州・沖縄県	提言者	仲間 智	宮古島市立狩俣中学校	第5B
13	13	北海道・オホーツク	提言者	上野さえ子	佐呂間町立浜佐呂間小学校	第5B
14	1	全公教	会長	稲積 賢	松戸市立第六中学校	挨拶後退室
15	2	全公教	副会長	大高 珠恵	川口市立元郷小学校	第1B (フリー)
16	3	全公教	副会長	三木 直史	八王子市立加住小学校	第1B (フリー)
17	4	全公教	庶務	中原 秀一	町田市立真光寺中学校	第5A (フリー)
18	5	全公教	研究部長	鈴木 智博	阿賀野市立水原小学校	第1A (フリー)
19	6	全公教	研究部員	中津 大輔	青森市立荒川中学校	第1A
20	7	全公教	研究部員	小林 亮太	さいたま市立三室中学校	第1B
21	8	全公教	研究部員	植木 征樹	桐生市立梅田中学校	第2
22	9	全公教 大会実行委員	研究部員 事務局次長	伊藤 大輔	札幌市立幌東中学校	第3
23	10	全公教	研究部員	荒木 達彦	東海市立船島小学校	第3
24	11	全公教	研究部員	南 昌伸	田原本町立東小学校	第4
25	12	全公教	研究部員	露木 克久	八頭町立八東小学校	第4
26	13	全公教	研究部員	濱田 伸哉	松山市立久米中学校	第5A
27	14	全公教	研究部員	奥野 英二	宮崎市立加納中学校	第5B
28	15	全公教	事務局長	井部 良一	全公教事務局	第2 (フリー)
29	16	全公教	事務局	御守 薫子	全公教事務局	第3 (フリー)
30	1	兵庫県	9年度開催地	石野 誠悟	たつの市立東栗栖小学校	第1A
31	2	兵庫県	9年度開催地	立花 貴志	芦屋市立浜風小学校	第1A
32	3	兵庫県	9年度開催地	酒向 祐介	西宮市立総合教育センター附属 西宮浜義務教育学校	第1A
33	4	兵庫県	9年度開催地	藤田 涼子	西宮市立香櫨園小学校	第1B
34	5	兵庫県	9年度開催地	高原 督友	姫路市立安室東小学校	第1B

		所属	立場	名前	勤務地	分科会
35	6	兵庫県	9年度開催地	黒瀬 将行	神戸市立高丸小学校	第2
36	7	兵庫県	9年度開催地	泉 しのぶ	神戸市立渚中学校	第2（フリー）
37	8	兵庫県	9年度開催地	藤原 禎司	市川町立鶴居小学校	第3
38	9	兵庫県	9年度開催地	小谷 俊正	朝来市立糸井小学校	第4
39	10	兵庫県	9年度開催地	横江 博之	明石市立花園小学校	第4（フリー）
40	11	兵庫県	9年度開催地	蓬萊 知子	三木市立吉川中学校	第5A
41	12	兵庫県	9年度開催地	西垣 雅文	丹波市立東小学校	第5B
42	13	兵庫県	9年度開催地	坂本 伸明	三木市立緑が丘中学校	第5B
43	1	島根県	10年度開催地	清山 智江	松江市立忌部小学校	第3
44	1	大会実行委員	実行委員長	照井 志暢	札幌市立円山小学校	第1A
45	2	大会実行委員	実行副委員長	中川 幸治	札幌市立西陵中学校	第3
46	3	大会実行委員	実行副委員長	野崎 猛	札幌市立北九条小学校	第1B
47	4	大会実行委員	実行副委員長	一関 浩	札幌市立上野幌中学校	第2
48	5	大会実行委員	大会事務局長	鈴木 圭一	札幌市立北都小学校	第2
49	6	大会実行委員	事務局次長	三浦 祐大	札幌市立東園小学校	第4
50	7	大会実行委員	事務局次長	矢澤 研	札幌市立白楊小学校	第4
51	8	大会実行委員	事務局次長	保格 諭	札幌市立白石中学校	第1A
52	9	大会実行委員	事務局次長	渡邊 裕治	札幌市立宮の森小学校	第5B
53	10	大会実行委員	総務部長	前田真奈美	札幌市立前田中央小学校	第1A
54	11	大会実行委員	総務副部長	中島 大輔	札幌市立西小学校	第3
55	12	大会実行委員	総務副部長	中川 雅之	札幌市立簾舞中学校	第4
56	13	大会実行委員	庶務部長	林 潤一	札幌市立伏古北小学校	第3
57	14	大会実行委員	庶務副部長	中村 珠世	札幌市立八軒北小学校	第1B
58	15	大会実行委員	庶務副部長	押切 智哉	札幌市立福井野中学校	第5A
59	16	大会実行委員	研究部長	道佛 智志	札幌市立北野小学校	第5A
60	17	大会実行委員	研究副部長	長谷川洋志	札幌市立篠路小学校	第1B
61	18	大会実行委員	研究副部長	岡本 真吾	札幌市立札幌中学校	第5B
62	19	大会実行委員	研究副部長	上野智恵美	札幌市立中央中学校	第5B
63	20	大会実行委員	広報部長	杉田 勝	札幌市立南が丘中学校	第5A
64	21	大会実行委員	広報副部長	佐藤 宏充	札幌市立手稲鉄北小学校	第1B
65	22	大会実行委員	会計部長	市川 暁子	札幌市立北野台中学校	第1A
66	23	大会実行委員	分科会運営委員	齋藤 直樹	札幌市立もみじの丘小学校	第1A
67	24	大会実行委員	分科会運営委員	青木 啓洋	北広島市立緑ヶ丘小学校	第1A
68	25	大会実行委員	分科会運営委員	森岡 香子	札幌市立八軒中学校	第1B
69	26	大会実行委員	分科会運営委員	齊藤 敏弘	小樽市立銭函中学校	第1B
70	27	大会実行委員	オンライン担当者	羽毛 靖恵	札幌市立二条小学校	第1B
71	28	大会実行委員	分科会運営委員	渡部 堅	札幌市立新陵中学校	第2
72	29	大会実行委員	分科会運営委員	後藤 健	札幌市立西野小学校	第2

		所属	立場	名前	勤務地	分科会
73	30	大会実行委員	オンライン担当者	高橋 健一	札幌市立福移学園	第2
74	31	大会実行委員	分科会運営委員	鞍貫 耕平	江別市立江別第一中学校	第2
75	32	大会実行委員	分科会運営委員	中村 隆城	札幌市立北都中学校	第3
76	33	大会実行委員	分科会運営委員	岡本 功一	札幌市立栄東小学校	第3
77	34	大会実行委員	オンライン担当者	神 充哲	札幌市立平岡小学校	第3
78	35	大会実行委員	分科会運営委員	小路 美和	札幌市立新川中学校	第4
79	36	大会実行委員	分科会運営委員	高橋 学	余市町立西中学校	第4
80	37	大会実行委員	オンライン担当者	安澤 徹也	札幌市立真駒内公園小学校	第4
81	38	大会実行委員	分科会運営委員	丸山 浩太	札幌市立琴似中学校	第5A
82	39	大会実行委員	分科会運営委員	今野 信彦	南幌町立南幌小学校	第5A
83	40	大会実行委員	オンライン担当者	菅谷 昌弘	札幌市立厚別中学校	第5A
84	41	大会実行委員	分科会運営委員	田中 敏貴	札幌市立新川中央小学校	第5A
85	42	大会実行委員	分科会運営委員	笹野 直人	札幌市立西岡北小学校	第5B
86	43	大会実行委員	分科会運営委員	阿部 哲	長沼町立長沼中学校	第5B
87	44	大会実行委員	オンライン担当者	渋谷 啓一	札幌市立厚別南中学校	第5B
88	45	大会実行委員	事務長	吉田 信興	道公教事務所	ホスト 第2
89	46	大会実行委員	事務職員	丹羽真悠子	道公教事務所	ホスト補助 フリー